

## 1 高原地区の概要

### (1) 概要

高原地区は、邑南町の中央東寄りに位置する面積 4,539ha の地区である。21 の集落（362 世帯 872 人、高齢化率 45.9%）、2 つの自治会があり、「星が丘」と呼ばれる地域には、保育園、小学校、邑南町社会福祉協議会本部、公民館が隣接する。

長年活発に活動している高原神楽団や地芝居団体「星が丘一座」は、地区内外でイベント出演を行っている。

高原地区は山間部にありながら、かつて海だったことから、主に貝化石が発掘されることを活用し地区内外から参加者を募る化石発掘体験の取組が行われており、町内小中学校の学習の場としても活用されている。また 3 年前には「ブッポウソウを愛する会」が結成され、渡り鳥のブッポウソウ保護活動を基本に豊かに残る自然環境の保全への取り組みを始めている。

高原出身の小林徳一郎は、事業に成功した後、郷土への多額の寄付や、出雲大社の大鳥居を寄進したことで知られている。

## 2 事業の趣旨

多くの地域住民が学び卒業した地元の小学校。児童数は減っても、昔と同じように元気に学んでいる子どもたちの姿を見て、もっと子どもたちと接したい、伝えたいと思っている人も多い。きっかけを作り、子どもと地域の大人が知り合いになり、子育て中であるに問わず積極的に子どもたちの成長に関わろうとする大人の意識を高め、安心感のただよう地域の雰囲気を作っていく。

## 3 具体的な取組内容

### ① 星が丘ふれあいコンサート

地元の中学校、高校、公民館コーラス教室などの皆さんによるコンサート。小学校を卒業した先輩方が演奏する音楽に触れる機会をもち、子どもたちには地元の中学校、高校、公民館活動を身近なものに感じてもらう。昨年の意見（人がふれあうコンサート）を取り入れるため、舞台と観客がふれあう場面を作るよう出演者に依頼し、多くの子どもたちが踊れる曲を演奏してもらいステージ前に出てみんなで踊る演出をした。



小・中・高校生が飛び入りでダンス

### ② とらいトライ！川遊び

地元の川で投網実演の見学、川の生き物の観察などをして約 3 時間ゆったり川遊びを実施。子どもだけでなく、地域の大人や、地区外からも親子連れで参加があった。竹細工など子どもたちへ体験活動を企画実施していたが、親が子どもをあずけて迎えにくるような関わり方をする保護者も多かった。保護者もいっしょに遊ぶために、大人のスタッフが多く必要な川遊びに変更した。スタッフがこのために個人的に購入したドラム缶

風呂を設置したり、アユやイノシシ肉を提供したりしていただき、河原でも楽しむことができた。



ドラム缶風呂も初めての体験

### ③ 雁皮を原料にした紙漉き体験

18年続く高原小学校の卒業証書を雁皮紙を漉いて作る取り組みで、地域の協力者の方には最大10回の指導、作業をお願いしている。今回は当初からかかわって下さっている地元指導者に加えて、子どもたちが作業をする様子や仕上げの紙漉きなどを見学、いっしょに作業をする人を募り、この紙すきの行程を一人でも多くの大人が関わり今後も続けていくことができるよう働きかけた。



卒業証書を雁皮紙で作成。1枚作るのに4回漉いて1枚の紙に仕上げます。

## 4 評価と成果

参加対象者を限定するのではなく、広く呼びかけた。また公民館の部員へも、それぞれの行事に参加を促すよう案内ハガキをだし、関心を高めてもらうよう働きかけた。当日参加できなかった部員に対しては、どんな様子だったか、どんな改善点が必要だ

と感じたかを部会で伝え、次回への参加意欲を持ってもらうよう促した。

各部が企画して準備、実施するこれらの公民館事業に、担当事業ではないにもかかわらず、積極的に参加する部員の姿を見ることができた。全員が主体的に公民館事業に関わっているとは言えないが、縦割りではなく参加したいという気持ちを持つ事業の仕掛けが少しできたのだと考える。また公民館の地区をこえて参加者があったことは、それぞれの事業に関わっていた人が声掛けをして、地区の壁を取ってくださった結果で、さらに関わる人のつながりが広がる可能性がある。

## 5 今後の課題と見通し

昨年の課題としてあげて、今年度取り組もうとしていた、保護者世代の参画を目的とした、子ども会活動と公民館活動との連携強化が十分できなかった。特に公民館として、2つの子ども会役員へ趣旨を説明し、会議を持ちかけた結果、保護者からは「負担増の懸念」「十分忙しい」などを言われて前向きな姿勢になってもらうことができなかった。公民館が子どもたちに体験してほしいことと、保護者や子ども自身がしたいこと、興味があることにずれがあるのかもしれないと感じる場面があった。「子どもたちにこんなことをさせたい」という公民館の思いと、保護者や子どもたちのニーズをすり合わせるができるよう、まず、それぞれの子ども会の様子を聞き、一つでもできることを実行する。保護者から提案されたことを、ひとつでも公民館で実践し、公民館の利用方法を保護者世代に理解してもらい、信頼を得て徐々に関わる人を増やす。その過程の中で、高齢者の活躍の場を作れるようコーディネートしていきたい。

(文責：主事 佐藤匡裕)